

地球の破滅を防ぐため、知性を使って欲望を制御しよう。

～以下、「時流持論 『最後の世紀』 避けるために」 <長谷川眞理子（早大政経学部教授／動物行動学・行動生態学）>

（朝日新聞<03.9.7>）より～

（青太文字は引用者が強調のためにそうしました。）

（これ以前、略）エネルギーの使いすぎから起きる地球環境問題も、人々が感じている以上に深刻である。

地球の生態系を動かしているエネルギーの源泉は太陽だ。太陽が風や雨を生み出す。光合成する植物が太陽エネルギーを栄養に変えて蓄え、動物たちがそれを食べて生きている。地球表面の生産性は、要は、太陽エネルギーがどれほど風や水の流れを引き起こし、どれほど植物という形に変換されているかにかかっているのだ。

少し前、世界の生態学者が、この地球表面全体で毎年どれほどの生態学的な生産性があるのかを推定し、人間が毎年どれほどエネルギーを使っているかを、計算して、両者を比較した。そうしたところ、人間が使うエネルギーは、どんどん増加しているのだが、70年代の終わりごろから、**人間というたった一つの種だけで、地球表面の全生産性を超えるエネルギーを使うようになり、現在では、地球1・2個分に当たる量を消費している**ことがわかった。

なぜこんなことが可能かといえば、地下資源や核を燃やしているからである。しかし、地下資源などは、本来なら使われることのない、余分なエネルギー源である。つまり、生態学的に言えば、70年代終わりごろから、人間は、毎年のフローではやっていけず、貯金に手を出す生活を始めたと言えるだろう。

物質の究極を探る物理学も、生物全体の相互関係を探る生態学も、人間の知性の産物である。いまや人間は、自分自身を作り上げているゲノム情報すら手に入れている。

人間の知的な活動には、限界がないかもしれない。人間は、好奇心も合せて自分たちの欲望をかなえるために、この知性を最大限に利用してきた。21世紀が人類最後の世紀となるかどうかは、今度は、**欲望の制御のために知性をどれだけうまく使えるかにかかっている**ような気がする。